

# 域学連携による運動遊びの実践 —「名古屋土曜学習プログラム」の取組—

鈴木 一成

保健体育講座

## Case Study of Play Based Learning in Community and University Integration: -Activities of Nagoya Saturday Learning Program-

Kazunari SUZUKI

*Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### I. はじめに

#### 1. 域学連携とは

「域学連携」とは、総務省によると「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民や NPO などとともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動のこと」とある<sup>1)</sup>。類似語として「産学官連携」あるいは「産学連携」があるが、産学連携学会の設立趣意書によると、「産業セクターと大学セクターを本格的に架橋し、それによって『学術研究に基礎づけられた産業』を活性化することを目指す諸活動の総称」となっている<sup>2)</sup>。これは産業活性化を目的とした経済性重視といえる。また、「サービス・ラーニング」は、「経験学習の伝統があるアメリカにおいて発展した教育形態のこと」である<sup>3)</sup>。また、「学生たちが、人々とコミュニティのニーズに対応した活動に従事する中で学ぶ、経験学習のひとつの形であり、そこには意識的に学生の学びと成長を促進するように設計された構造的な機会が含まれている」とされる<sup>4)</sup>。わが国においても、ボランティア活動に内在する学習性に着目し、教育実践として再構成され高等教育でも広がりを見せている<sup>5)</sup>。本学の学部及び教職大学院のカリキュラム設計にもあるといえる。本研究の「域学連携」を定義するために、少し長い引用をする<sup>6)</sup>。

域学連携は既述した総務省の定義に見られるように、地域の住民や学生、教員という「人的資源」の連携にフォーカスされていて、その成果は必ずしも経済効果的なものだけに重きを置くものではなく、地域の人材育成や人的交流の促進を意識していると考えられ

る。この点が、経済性を重視している産学官連携とは大きく異なる点である。またサービス・ラーニングのように、ボランティア活動に内在する学習性に着目した活動に特化したものではなく、あくまで地域の活性化という『成果』を意識しつつ、そのプロセスにおいて人材育成効果という学習性にも寄与する活動である点において、サービス・ラーニングとも異なる活動と考える。

これらのことから、本研究における「域学連携」は「大学生と大学教員が、地域の住民（特に、子どもたち）や自治体・その他諸団体の関係者（特に、教育委員会）と共に地域の活性化と人材育成に資する活動」とする。

#### 2. 本研究の目的

本学は明治6（1873）年に愛知県養成学校の設立以来、教員養成を第一の目的として教育研究の充実を図ってきた。2021年3月には「未来共創プラン」を策定・公表した。そのビジョンは「愛知教育大学は、子どもと共に、学生と共に、社会と共に、附属学校園と共に、未来の教育を創る」とされ、「子どもを大切にする、学生を主体的な存在として尊重する、地域社会、学校、教育委員会とのつながりを大切にする」等の視点が掲げられた<sup>7)</sup>。域学連携の取組は、これらの視点を具体化するものであり、「地域から頼られる大学」を目指す本学にとって重要なものになると考える。

しかしながら、実際にどのような活動を展開しているかは、名は体を表すごとく「未来共創」に委ねられている。そこで、その具体に迫るために、本研究では、域学連携による運動遊びの実践として、2015（平成27）年度から2020（令和2）年度までの6年間の名古屋土曜

学習プログラムの取組について、参加者と学生アンケートの調査と合わせて報告することを目的とする。

### 3. 実践の概要

名古屋土曜学習プログラムとは、名古屋市教育委員会生涯学習課の事業の一つである。その趣旨は、「子どもたちが教科学習で学んだ知識・技能を実際に生かして、学ぶ意義を見出すために、実生活でさまざまな課題を見つけ、その解決について学ぶ体験学習の充実を図る」ことである<sup>8)</sup>。内容は「子どもたちの豊かな土曜日を実現するために、地域、保護者、外部人材、民間事業者等の協力を得て、伝統文化や科学実験等、体験を重視した学習を実施する」ことである。2021(令和3)年度では、名古屋市内の実施は40小学校区の予定である<sup>9)</sup>。図1は、その実施イメージである<sup>10)</sup>。

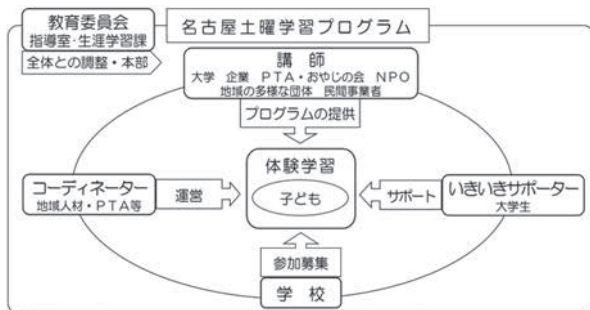


図1 名古屋土曜学習プログラムの実施イメージ<sup>10)</sup>

子どもの体験学習を支えるのは大きく4つである。事業の趣旨に即して、大学・企業・PTA・おやじの会・NPO・地域の多様な団体・民間事業者がコンテンツを提供する「講師」、地域の人材の活用を意図した「コーディネーター」、名古屋市教育委員会と大学が連携して大学生を派遣する「いきいきサポーター」、参加募集を担う「学校」である。これら全体の調整と本部の機能として「名古屋市教育委員会 指導室・生涯学習課」が位置づく企画・運営体制となっている。このような企画・運営体制は、さらに地域の実情に合わせて、「コーディネーター委嘱型」「地域団体委嘱型」「大学連携型」の種類がある。本研究では「大学連携型」の事例となる。これは、まず、大学(筆者)と名古屋市教育委員会及び地域団体とプログラムの企画を検討し、決定した。次に、「いきいきサポーター」となる大学生の派遣は、愛知教育大学をはじめとする大学の協力により行った。そして、実施の当日、全体の運営及びコーディネーターは各小学校区のPTAや地域団体が実施した。

子どもたちの豊かな土曜日の実現に向けて、大学生と大学教員が、地域の住民や自治体・その他諸団体の関係者と共に地域の活性化と人材育成に資する活動となると考える。本取り組みの実践事例を報告することで、本学が目指す「未来共創」へのアイデアの提供にも資することができると思われる。

### 4. 取り扱う運動遊びの考え方

先に述べたように、名古屋土曜学習プログラムは「子どもたちが教科学習で学んだ知識・技能を実際に生かして、学ぶ意義を見出すために、実生活でさまざまな課題を見つけ、その解決について学ぶ体験学習の充実を図ること」である。この趣旨から本研究では運動遊びを設定した。また、本事業の打ち合わせ等で、名古屋市の子どもの体力・運動能力等調査結果の低下や下げ止まりの傾向があること、その原因が地域での遊び場の減少や消滅等にあることは、地域の活性化にも大切な課題であるとして、事前の話し合いで確認してきた。この課題を受けて、本事業の主旨から、運動遊びの選定理由について、表1の平成29年告示の小学校学習指導要領における体育の内容構成に求めた<sup>11)</sup>。

表1 体育の内容構成

学年	1・2	3・4	5・6
領域	体つくりの運動遊び	体 つ く り 運 動	
	器械・器具を使っている運動遊び	器 械 運 動	
	走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動
	水遊び	水 泳 運 動	
	ゲ ー ム		ボール運動
	表現リズム遊び	表 現 運 動	
		保 健	

この表の左側の1・2学年をみると「運動遊び」という言葉が並ぶ。この改訂で名称変更となった「体づくりの運動遊び」は、その内容も全て「運動遊び」として示されている。これは、「児童が易しい運動に出会い、伸び伸びと体を動かす楽しさや心地よさを味わう遊びであることを強調したものであり、以下の各領域においても同様の趣旨である」として、「入学後の児童が就学前の運動遊びの経験を引き継ぎ、小学校での様々な運動遊びに親しむことをねらいとしている」とある<sup>1)</sup>。すなわち、義務教育のスタートとして位置づく運動遊びは、その後の学びの畑作りとなるだけではなく、その豊かな土壌は一生の財産となり、豊かなスポーツライフの実現に資する機会になろう。さらに、運動遊びは、異学年、異世代を超えて、参加者全員のウエル・ビーイングの実現する可能性があると考えられる。こうした機会は、教員養成の学部生や教職大学院生にとっても、地域の方々との交流から、体育科・保健体育科の学びを活性化することにも期待できる。

## Ⅱ. 実践の具体

### 1. 2015（平成27）年度

#### 用具・器械・器具を使った運動遊び

2015（平成27）年6月20日の午前に名古屋市緑区の小学校体育館で実施した。体験学習のねらいは「なわ跳び、器械・器具を使った運動遊び、ボール遊びを通して、楽しみながら体を動かす」であった。参加児童数は、小学1年27名、小学2年23名、小学3年10名、特別支援学級1名の計61名であった。「いきいきサポーター」の大学生は5名、「コーディネーター」のPTA関係者は5名、名古屋市教育委員会関係者4名と講師（筆者）の15名体制であった。内容と方法は、筆者が企画したプログラムを行った。なわ遊び、器械・器具を使った運動遊び、ボール遊びの3つを約40分ずつ実施した。「いきいきサポーター」の大学生は、安全面に留意しながら子どもたちと共に遊び、全体進行は「コーディネーター」が行った。実践後には、「コーディネーター」が名古屋市教育委員会生涯学習課が準備したアンケートを実施した（図2・図3・図4）。

自由記述の感想文には「楽しかった。体がきたえられて楽しかった（小学1年）」「上手にできて楽しかった（小学1年）」「運動があそびみたいで楽しかった（小学2年）」「こういう土曜学習がいい（小学2年）」「家でできないことができた（小学2年）」「なわとびがたくさんできた（小学2年）」「また来たい（小学3年）」などがあった。

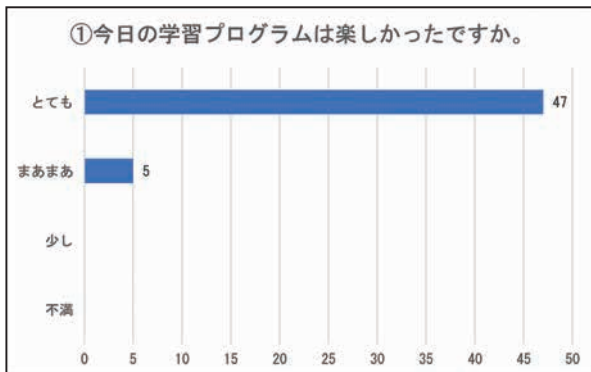


図2 2015年度児童のアンケート結果①

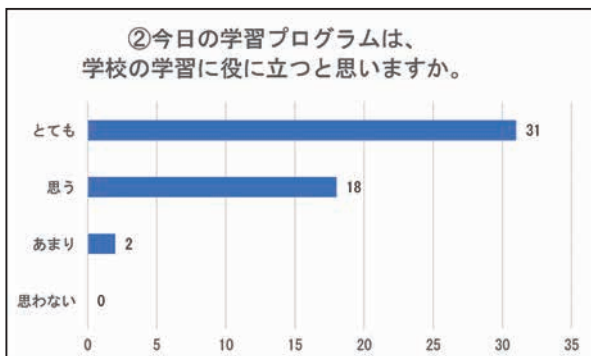


図3 2015年度児童のアンケート結果②

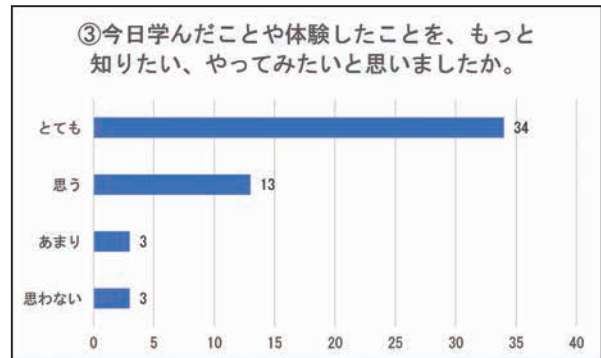


図4 2015年度児童のアンケート結果③

実施後の振り返りでは、子どもの感想を中心に企画・運営に携わった方々の感想を交流した。主に、なわの創作は地域の方々も参加可能で好評であった。

### 2. 2016（平成28）年度 なわとび遊び

2016（平成28）年1月23日の午前に名古屋市中区村の小学校体育館で実施した。体験学習のねらいは「なわ跳びを通して、楽しみながら体を動かす」であった。参加児童数は、小学1年23名、小学2年22名、小学3年20名、小学4年3名、小学5年2名の計70名であった。「いきいきサポーター」の大学生は5名、「コーディネーター」のPTA関係者は4名、名古屋市教育委員会関係者3名と講師（筆者）の13名体制であった。内容と方法は、実施校の実態を踏まえて筆者が企画したなわとび遊びとした。1人で回したり跳んだりする「短なわ」、2人や3人で回ったり跳んだり受け渡したりする「中なわ」、4人以上で複数本のなわを使った「長なわ」の3つを約40分ずつ、適宜休憩を入れて実施した。「いきいきサポーター」の大学生には、主に安全面に留意しながら子どもたちと共になわとび遊びに加わってもらった。全体進行は「コーディネーター」が行った。実施時期が冬であり、かなり寒い中での実践となったため、終了後はすぐに解散となってしまい、予定していたアンケート実施はできなかった。実践後には、企画・運営担当者の13名で振り返りを行った。「いきいきサポーター」の学生からは「安全面には留意して子どもたちとかがかわることができたが、子どもたちのなわとび遊びが停滞したときにどのようなアプローチがあるか分からず戸惑ってしまった」という感想があった。次年度の改善点としたいと考えた。

### 3. 2017（平成29）年度 なわとび遊び・走の運動遊び

2017（平成29）年は2つの実践を行った。1つは、6月2日の午前に名古屋市熱田区の小学校体育館で実施したなわとび遊びである。体験学習のねらいは「なわとび遊びを通して、楽しみながら体を動かす」であった。参加児童数は、小学1年20名、小学2年22名、小学3年20名、小学4年5名、小学6年3名の計70名で



あった。「いきいきサポーター」の大学生は5名、「コーディネーター」のPTA関係者は4名、名古屋市教育委員会関係者3名と講師（筆者）の13名体制であった。内容と方法は、名古屋市教育委員会からの提案があり2016年度実践と同様とした。「いきいきサポーター」の大学生には、昨年度の反省も踏まえて、なわの創作の活動を中心としつつ、なわとび遊びが停滞したときには「回し方・なわの入り方と抜け方・人数・回数」の4つの視点を筆者から伝えた。そして、実践では、安全面に留意しながら子どもたちと共になわとび遊びに加わってもらった。全体進行は「コーディネーター」が行った。なお、6月の体育館は湿気が多く蒸し暑い中で実施となったため、適宜、水分補給等の指導も積極的に行った。1名体調不良により早退となり、その対応等があり、アンケートは不実施であった。

もう1つは、12月16日の午前に名古屋市港区の小学校体育館で実施した走の運動遊びである。体験学習のねらいは「スタートの仕方や足の使つかい方などの走り方を中心に学習を行い、速く走ることができるようにするための動きづくりにトライする」であった。参加児童数は、小学1年5名、小学2年8名、小学3年6名、小学4年4名、小学5年3名の計26名であった。「いきいきサポーター」の大学生は4名、「コーディネーター」のPTA関係者は3名、名古屋市教育委員会関係者2名と講師（筆者）の10名体制であった。内容と方法は、会場校のニーズをふまえた。「いきいきサポーター」には安全面に留意しながら子どもたちと共に関わって体験学習に加わってもらった。全体進行は「コーディネーター」が行った。実践後には、「コーディネーター」が、名古屋市教育委員会生涯学習課が準備したアンケートを実施した（図5・図6・図7）。

自由記述の感想文には「楽しいよ、うれしいよ、1番になれてよかったです(小学2年)」「今日来てよかった(小学2年)」「スキップがかなり楽しかった、もっとやりたい(小学3年)」「走るのがすきになった(小学3年)」「とても早く走りたかったので来てよかった(小学5年)」などがあつた。

実施後の振り返りでは、企画・運営に携わった方々

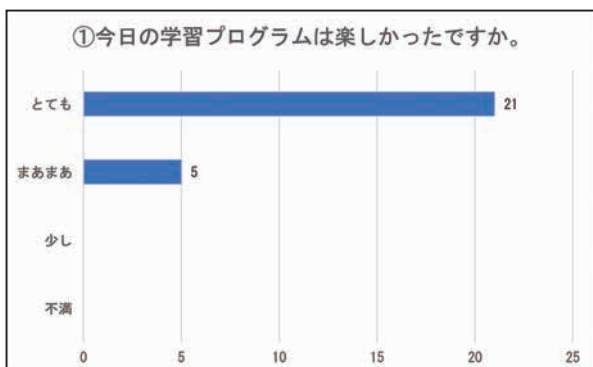


図5 2017年度児童のアンケート結果①

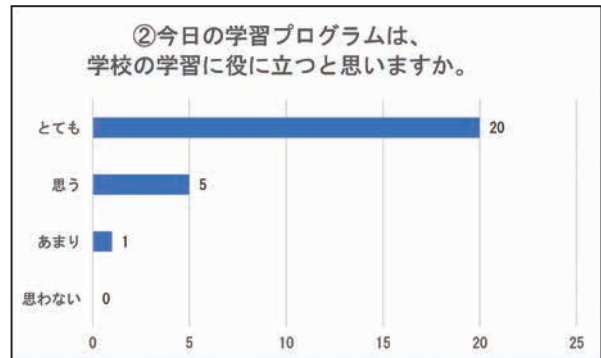


図6 2017年度児童のアンケート結果②

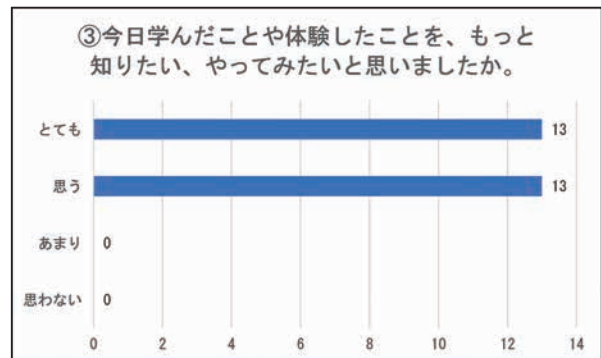


図7 2017年度児童のアンケート結果③

の感想を交流した。「いきいきサポーター」の学生の感想には、児童と保護者へのチラシの内容についてふれ、「1つの取り組みには事前の準備の大切さを感じました。」と添える一幕もあり、地域の方々もうれしそうであり、参加者全員が活動できたことも好評であった。

#### 4. 2018（平成30）年度 なわとび遊び

2018（平成30）年6月2日の午前に名古屋市熱田区（1回目）、7月7日の午前に名古屋市港区（2回目）のそれぞれの小学校体育館で実施した。いずれも体験学習のねらいは「①短なわでできるいろいろな技の体験～「二重跳びがたくさんでできる」「速く回せればいい」だけにとどまらない、いろいろな跳び方やまわし方によってできる技を体験すること」と「②中なわや大なわでできるいろいろな技の体験～なわのまわし方、なわへの入り方、なわからの抜け方、なわの受け渡し方を工夫し、グループで技を作り上げていくこと」の2つとした。これは昨年度の体験活動を踏まえて、子どもたちのなわとび開発に重点を置くものであった。

1回目の参加児童数は、小学1年28名、小学2年28名、小学3年10名、小学4年1名、小学校5年3名の計70名であった。「いきいきサポーター」の大学生は6名、「コーディネーター」のPTA関係者は4名、名古屋市教育委員会関係者3名と講師（筆者）の14名体制であった。

2回目の参加児童数は、小学1年7名、小学2年8名、小学3年4名、小学4年1名、小学5年3名、小学6年3

名の計26名であった。「いきいきサポーター」の大学生は5名、「コーディネーター」のPTA関係者は4名、名古屋市教育委員会関係者2名と講師（筆者）の12名体制であった。

1回目も2回目も「いきいきサポーター」の大学生には、主に安全面に留意しながら子どもたちと創作活動を「回し方・なわの入り方と抜け方・人数・回数」の4つの視点から支えることを筆者から依頼した。いずれの回も全体進行は「コーディネーター」が行った。実践後には、「コーディネーター」は名古屋市教育委員会生涯学習課が準備したアンケートを1回目（図8・図9・図10）と2回目（図11・図12・図13）に実施した。実施後の振り返りでは、企画・運営に携わった方々の感想を交流した。「いきいきサポーター」は臨機応変に本体験学習をサポートする姿に対して地域の方か

らは高評価であった。しかし、学生は具体的にどのような学びを実現しているかについては不明瞭な点もあると考え、次年度への改善点としたいと考えた。

## 5. 2019（令和元）年度 なわとび遊び

2019（令和1）年5月25日の午前に名古屋市天白区（1回目）、6月1日の午前に名古屋市名東区（2回目）のそれぞれの小学校体育館で実施した。いずれも体験学習のねらいは昨年度同様に「①短なわでできるいろいろな技の体験～「二重跳びがたくさんできる」「速く回せばいい」だけにとどまらない、いろいろな跳び方やまわし方によってできる技を体験すること」と「②中なわや大なわでできるいろいろな技の体験～なわのまわし方、なわへの入り方、なわからの抜け方、なわの受け渡し方を工夫し、グループで技を作り上げてい

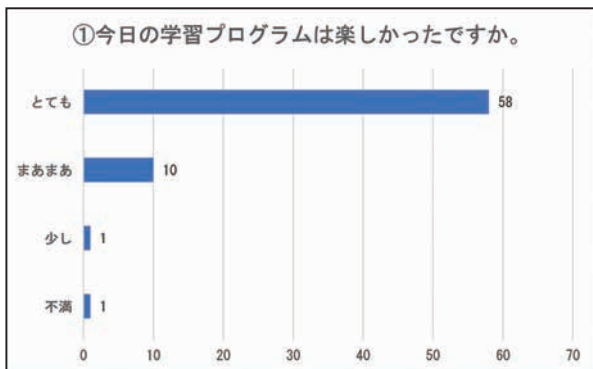


図8 2018年度1回目 児童のアンケート結果①

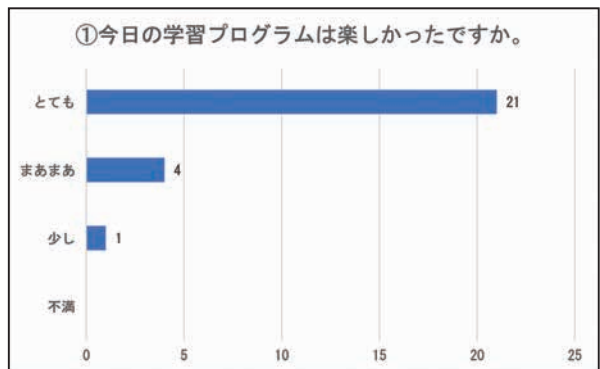


図11 2018年度2回目 児童のアンケート結果①

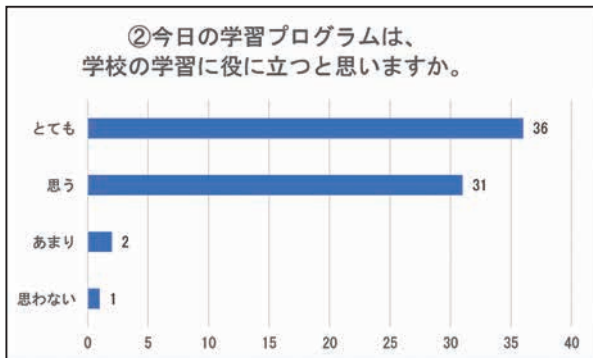


図9 2018年度1回目 児童のアンケート結果②

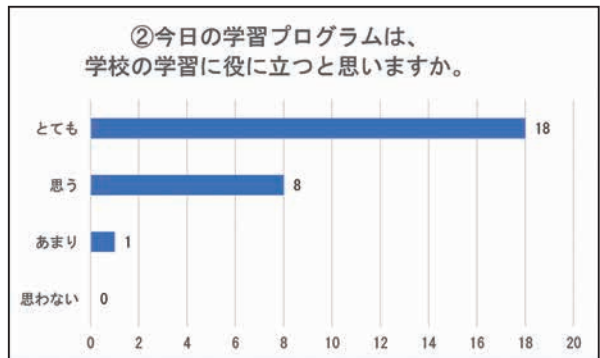


図12 2018年度2回目 児童のアンケート結果②

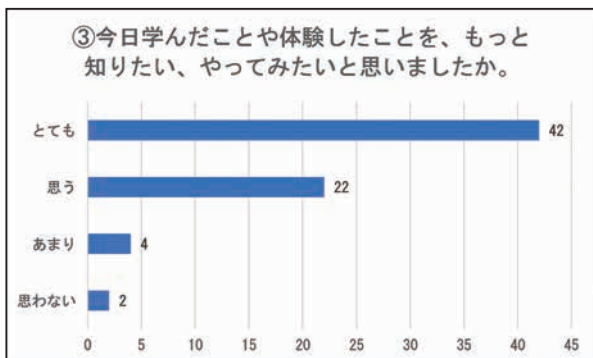


図10 2018年度児童のアンケート結果③

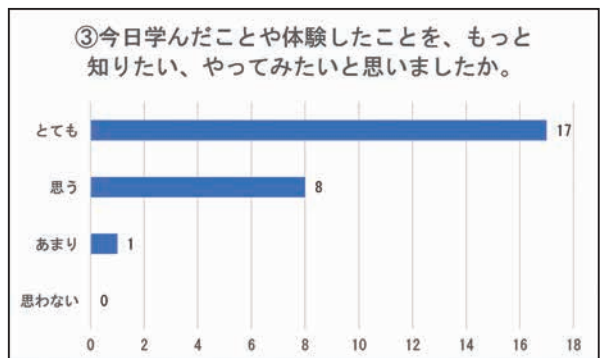


図13 2018年度2回目 児童のアンケート結果③

くこと」の2つとした。これは昨年度の体験活動を踏まえて、子どもたちのなわとび開発に重点を置くものであった。

1回目の参加児童数は、小学1年24名、小学2年24名、小学3年8名、小学4年2名、小学5年3名、小学6年2名の計63名であった。「いきいきサポーター」の大学生は4名、「コーディネーター」のPTA関係者は3名、名古屋市教育委員会関係者2名と講師（筆者）の10名体制であった。2回目の参加児童数は、小学1年17名、小学2年18名、小学3年10名、小学4年1名、小学5年1名、小学6年2名の計49名であった。「いきいきサポーター」の大学生は6名、「コーディネーター」のPTA関係者は4名、名古屋市教育委員会関係者2名と講師（筆者）の13名体制であった。1回目も2回目も「いきいきサポーター」の大学生には、子どもたちの創作活動を「回し方・なわの入り方と抜け方・人数・回数」の4つの視点から支えることを筆者から依頼した。いずれの回も全体進行は「コーディネーター」が行った。実践後の児童アンケートは実施されなかったが、昨年度の課題となった学生への学びをとらえる趣旨から、任意とした。以下は参加学生AとBの感想である。

#### 参加学生Aの感想（教員志望）

【学びとったこと】今回土曜学習に参加して、縄跳びという概念が変わりました。今までは縄跳びというと、技ができる、多くの回数を跳ぶことができるというのがよいと思っていました。しかし、縄跳びをする目的は用具操作だとおっしゃっているのを聞き、跳べなくてもいいんだ、縄跳びに正解はないんだということに気づくことができました。子どもたちも、今までにない跳び方を知り、挑戦しているときはとても楽しそうに取り組んでいました。後半に行ったグループ活動のときに、私では思いつかないような独創的な技を考えていて、子どもたちの柔軟な考えをもっと指導者の方から引き出していくことが大切なんだなと思いました。【やりがいを感じたこと】腕に縄を巻き付ける技のときにできない子がいて、私が少しアドバイスをしたらできるようになりました。そのときのその子の表情がとてもキラキラしていて、これからできたと感じてもらえる場面を多く作っていききたいなと思いました。喜んでいる姿を見て、私まで嬉しく感じたとともに、教えることの楽しさを再確認することができました。【印象に残ったこと】大縄跳びで、縄に入れなかった子どもたちがあの短時間で跳べるようになったことが一番印象に残っています。私がサポート活動に行っていた小学校では入るタイミングを1、2と声をかけて行っていました。しかし、それだと声に頼りすぎてしまい、縄のタイミングが怖くて入れない子どもでしてしまっていました。しかし今回は、上げて下したタイミ

ングで縄をまたぐという指導をされていてとてもいい指導法だなと思いました。そうすることで、子どもたちが自分でタイミングをつかみやすくなっていました。そのうえ、縄を跳ぶのではなく、またぐ、越えるという感覚が自然と身に付き、縄から抜けやすくなっているように感じました。今後、教える機会があればこの方法を活用していきたいです。

【今後、努力すべきこと】今回の反省として、子どもたちと打ち解けるまでに時間がかかってしまったということがあります。子どもたちも避けるようなことはほとんどなかったのですが、待つのではなく早めに自分の方から声をかけていきたいと思いました。短い時間の中でたくさんのことを指導するためにも、子どもたちのことを知ることが大切だと思います。今後は自分から積極的に子どもたちにかかわっていききたいと思います

#### 参加学生Bの感想（教員志望）

今回の名古屋土曜学習に参加して、地域の人々の協力によってこのプログラムがあることを知りました。このプログラムは小学1年～6年生までの幅広い年齢層を対象に行うことで、縦のつながりが増えて多くの交流の場を提供することができると感じました。また、1年生と6年生では6つも歳が離れているので当然「できる」「できない」の差が大きいはずなのにもかかわらず、鈴木先生は技にこだわらず、誰でもできるかつ楽しむことのできる運動をしていた。例えば、縄を回さずに大波小波で跳べるか試したり、縄を横に回したりなど、縄の回し方を色々な方法で回すということを重点に置いて学習を進めていた。全員が楽しんで取り組んでいる姿をみることで、技にこだわりすぎずに考えていくことも大切だと思いました。このプログラムで、子どもたちの笑顔をたくさん見れたことにやりがいを感じました。縄跳びで成功した時にみせる子どもたちの笑顔はとてもキラキラしていて楽しさが伝わりました。最後のアンケートでもほとんどの子どもが「とても満足した」と答えていて、私も指導者側に立ったら全員の笑顔を見れるような楽しい授業を行っていききたいと思いました。印象に残ったことは、全員が大縄跳びを跳べるようになったことでした。縄を下に置き、子どもが跳んだら縄を上を動かしてまた下に置き跳ばせるという運動を繰り返して行っていて、最初は何につながるのかわかりませんでした。しかし、そのあとに、縄を上下運動から少し回すように変えることで普通の大縄跳びの形になっており、全員が跳べるようになっていました。最終的には2本の縄でダブルタッチもできていてとても驚きました。子どもたちにとって「何ができない」のか、「何が難しい」のかを見つけ、その課題を解決するために段階を踏んで運動を行うことでできるようになると感じました。



また、講師の先生は基本的な動きよりもさらに基本な動き、例えば大縄跳びでいうと縄に入れない子に対して、縄を動かさずに跳ばせることのような一見その運動をしていないように見えるが、実は「縄を飛び越える」という運動は達成できているということになり、このような方法で全員を「できる」に変えていくことも参考になりました。小学生は学校教育の初期段階で「運動嫌い」の子どもを作らないためにとても大切な時期だと思うので、基本のさらに基本という考えで授業づくりをしていきたいと思いました。

このプログラムの体験で学んだ誰もが楽しめる体育授業を私自身指導する側に立った時にできるように生かしていきたいと思いました。また、地域と連携することで、学校がない土曜や日曜といった日に子どもたちに学びの場や遊びの場を提供することができるということを知りました。地域とのつながりも大切にしていきたいと思いました。

参加学生Aと参加学生Bの感想文から、学生の学びには、子どもたちとの関わり方に加え、なわとびの教材づくりと学習指導法、そして学校を起点にした社会教育を支える取り組みへの理解があったのではないかと考える。

## 6. 2020（令和元）年度 なわとび遊び（デジタル教材）

新型コロナウイルス感染症（COV-ID-19）の感染拡大防止により予定していたなわとび体験学習は実施されなかった。その代わりとして、「うちdeなわとび」と題して5分間の動画を作成して、名古屋市教育委員会生涯学習課のYouTubeチャンネルにアップした<sup>12)</sup>。

内容は、これまでの6年間の土曜学習において筆者が実施した内容の中から、特に子どもたちが積極的に活動した内容を「短縄を使った15種類の遊びや運動」として紹介するものとした（図14・図15）。再生回数は執筆時の2021年9月末日現在891回である。

### Ⅲ. おわりに

本研究では、域学連携による運動遊びの実践として、2015（平成27）年度から2020（令和2）年度までの6年間の名古屋土曜学習プログラムの取組について、参加者と学生アンケートの調査と合わせて報告することを目的とした。具体的には、「域学連携」は「大学生と大学教員が、地域の住民や自治体・その他諸団体の関係者と共に地域の活性化と人材育成に資する活動」として、運動遊びの実践事例であった。特に、なわとび遊びは、「回し方・なわの入り方と抜け方・人数・回数」の4つの視点とした手軽な共創教材として、異学年、異世代を超えた参加者全員のウェル・ビーイングの実現するに資する可能性があったと考える。こう



図14 「うちde なわとび」①<sup>12)</sup>

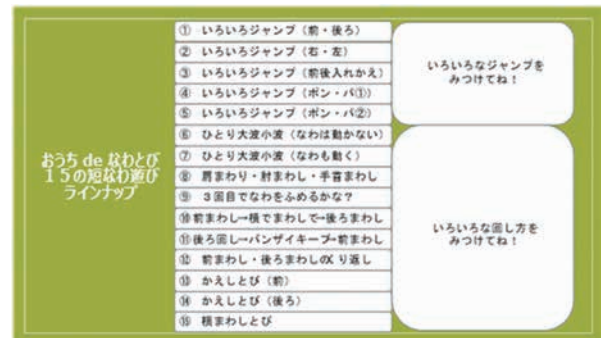


図15 「うちde なわとび」②<sup>12)</sup>

した機会は、教員養成の学部生や教職大学院生にとっても、地域の方々との交流から、体育科・保健体育科の学びを活性化することができたと考える。

本年度は2021（令和3）年5月と6月に予定していた。しかし、5月の実施については、まん延防止等重点措置の実施に伴う「愛知県感染防止対策協力金（4/20～5/11実施分）」により残念ながら中止となった。一方で、自粛要請や人流の抑制等が求められる中、子どもたちも含めて私たちのストレスの蓄積も懸念される。その中でも、本研究で提示した「域学連携」の実践は、まさに身をもって知ることや他者とのかかわりを肌で感じる絶好の機会がある。こうした学びには、地域の活性化と人材育成に資する活動の可能性があり、とりわけ、教員養成の学生にとっては貴重な機会となる。一方で、感染症拡大防止で、学生の学びもまた、いろいろな制約が強いられている現状である。地域社会もしっかりである。こうした社会とのつながりの中で、未来を共創していこうとする力そのものが、今、問われていると考える。本学が目指す「未来共創」は、価値づくりといえる。価値づくりには、機能的価値と意味的価値があり、後者は「状況依存的、暗黙知、非分割、潜在的」が特徴的であり、特に「暗黙知の共創が意味的価値をうむ」という<sup>13)</sup>。域学連携の取組として提示した運動遊びの意味的価値の検討については、今後の課題としたい。

# 引用参考文献

- 1) 総務省, 「域学連携」地域づくり活用, 2012)  
[https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html) (2021.9.22 閲覧).
- 2) 産学連携学会, 設立趣意書  
<http://j-sip.org/gaiyou.htm> (2021.9.22 閲覧).
- 3) 桜井政成, 地域ボランティア教育の深化と発展ーサービス・ラーニングの全学的展開を目指してー, 立命館高等教育研究第7巻, pp.21-40, 2007.
- 4) Jacoby, B. & associates, Service-Learning in Higher Education: Concepts and Practices, San Francisco, Calif. : Jossey-Bass Publishers, 1996.
- 5) 桜井政成・津上正敏, ボランティア教育の新地平, ミネルヴァ書房, 2009.
- 6) 田原洋樹, 域学連携型授業を通して観られる学習成果の検証について, 明星大学経営学研究紀第14巻, pp.1-18, 2019.
- 7) 愛知教育大学, 未来共創プラン  
[https://www.aichi-edu.ac.jp/intro/files/miraiyousou\\_leaflet\\_210608.pdf](https://www.aichi-edu.ac.jp/intro/files/miraiyousou_leaflet_210608.pdf) (2021.9.22 閲覧)
- 8) 名古屋市教育委員会 生涯学習課, 令和3年名古屋土曜学習プログラム実施の手引き〈土曜学習推進員(講師)用〉, 2021.
- 9) 前掲書8) p2.
- 10) 前掲書8) p1.
- 11) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋出版社, 2017, p26.
- 12) 鈴木一成, おうちdeなわとび, 2020.  
<https://www.youtube.com/watch?v=DnGo-I-XD7M&t=3s> (2021-05-01).1)
- 13) 延岡健太郎, 価値づくりの経営の論理, 日本経済新聞出版社, 2011.

(2021年 9 月 24 日受理)